ルネサンス プロ・スペシャリストを育てる37

専門性と協調性，発信力を育み即戦力となる人材に

岡山理科大学専門学校

〈岡山県岡山市〉

建築と動物系学科を有する岡山理科大学専門学校では，即戦力となる人材を育て，社会に送り出してきた。同校では高度な専門性だけでなく，協調性と発信力をバランスよく備えた人材育成に重きを置き，全学科に「キャリアマナー」を設置している。場の空気や仲間との協調性を意識し，心が伴ったマナーを身に付ける「キャリアマナー」の授業を取材した。

岡山理科大学専門学校

職人気質の学生に協調性と発信力を

岡山理科大学専門学校は昭和50年に、建築を専門に教える学校として誕生した。以来、動物看護学科やトリミング学科、アクアリウム学科など、時代の流れとニーズに応じて新学科を設置してきた。いずれの学科も中四国の専門学校では初めての設置であることから、企業や団体からの信頼も厚く、毎年、多くの学生を輩出している。

村岡正校長は同校の教育について「二つの要素を身に付けさせる教育を行っている」と説明する。

「一つ目の要素は、高度な知識と技術が身に付いていることです。そのため専門家や現場でキャリアを積んだプロの方々を講師に迎え、きめ細やかな指導を行っています。欠かせないのは〝学習者目線で指導する〟こと。前期と後期の授業の最後には必ず学生に授業についてのアンケート調査を行い、授業の進め方や説明の分かりやすさなどを学生に振り返ってもらいます。そうすることで学習者の意見を取り入れるのです。結果は教員にフィードバックし、授業の進め方の改善に役立てたり、質の向上を図っています。

村岡正校長

もう一つの要素は、コミュニケーション能力が身に付いていること。専門学校の特徴かもしれませんが、好きなことにはとことん打ち込む職人気質の学生が多く、専門分野の学びに対する意欲は非常に高いです。しかし一方で、一緒に働く仲間との協調性や自分から何かを発信する力は弱い。建築にしても、動物看護、アクアリウム、どの分野に進むにしても実際の業務はチームで協力し合うことにより達成されます。そのときに力を発揮できるようにするため、一年生の段階からあいさつや話し方、聞き方、基本的なマナー、協調性などを学ぶ授業を取り入れ、社会人基礎力を身に付けさせる教育を行っています」。

この社会人基礎力の育成を目的として設置しているのが「キャリアマナー」と「キャリアデザイン」である。いずれも全学科の1年生が履修する科目だ。「キャリアマナー」では基本的なマナーを身に付け、「キャリアデザイン」では仕事の本質について考え、職業研究なども行う。

「キャリアマナー」では、サービス接遇検定の内容を取り入れて指導を行っており、自身

校内には東屋とビオトープが設置されている。東屋は建築学科の学生が，ビオトープはアクアリウム学科の学生が制作した

トリミング学科の授業。近隣のお客さまから預かった犬のトリミングを行う。緊張感が漂う

岡山理科大学専門学校と岡山理科大学が開発した「好適環境水」。淡水魚と海水魚が共存できる。水槽は岡山駅に設置されており，多くの人の興味を引いている

ドッグトレーニング学科の授業。動物系学科は動物の世話があるため休日も学生は登校する。どの学科の学生も皆熱心だ

の達成度を図るために検定の受験も推奨している。必ず受験するよう指導しているわけではないが、毎年多くの学生がサービス接遇検定3級や2級に挑戦している。

場の空気を意識し、つくる キャリアマナーの授業

取材当日、アクアリウム学科では「キャリアマナー前期発表会」が開かれていた。

発表は6人1組で行われる。発表項目は幾つかあり、6人が声をそろえて「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」などの接客用語を披露したり、名刺交換の演習や早口言葉をリズムに合わせて発表していた。

特徴的なのは早口言葉を息をぴったり合わせて言うなど、ビジネスマナー以外の内容も発表に含んでいることだ。また、「始めます」「終わります」などの掛け声や、並び方、進め方などはグループで話し合って決めるため、それぞれの発表に個性があり、見応えもあった。

この発表会は、ビジネスマナーとどのように関わっているのだろうか。楠本敦子先生は次のように話す。

「今日の発表会では、発表を完璧に行うことよりも、発表者は聴衆のために聞きやすい発表を、聴衆は発表者が発表しやすい雰囲気をつくることを一番の狙いとしました。発表者が聴衆を意識することはもちろんですが、聞き手も作業をしながら聞かない、発表している人の方をしっかり向くという気遣いがなければ、よい発表会は成立しないものです。場の空気をつくるということは、〝相手や周りに配慮する〟ということ。このことは、円滑なコミュニケーションのために不可欠な要素です。マナーを身に付けるために必要な土台とも言えるでしょう」。

ビジネスマナーの学習では基本の型を覚えるのに注力しがちになるが、楠本先生は学生たちに、あえて発表やグループ活動の機会を多く与え、「他者への思いやり」を軸に据えて授業を展開しているのだ。楠本先生は授業の流れをこう説明する。

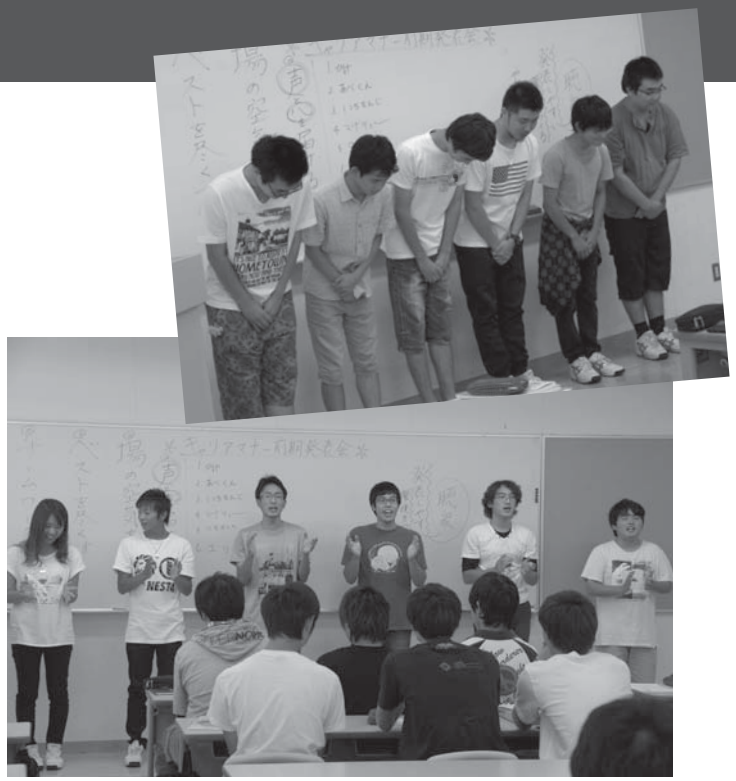
「第一回目は『何のために働くのか』というテーマで、一緒に働く仲間との協調性や、お客さまについて考える時間を設けています。そして、次の授業からはグループ学習と発表会を繰り返し行い、コミュニケーション能力を徐々に高めていきます。グループのメンバーの中には当然、自分や周りのメンバーと違う意見や考えを持つ人がいます。最初は自分との意見の違いに戸惑う様子を見せますが、さまざまな人とグループを組むことで、相手の話を積極的に聞いたり、自分の意見との折り合いの付け方を次第に学んでいきます」。

半年、一年と時を経るごとに、着実にコミュニケーション能力が付いてくるという。2年

次に進級し就職活動が始まる頃には、相手の話に耳を傾けるだけでなく、自分の意見も積極的に発言できるようになっているそうだ。

多数の学生が受験するサービス接遇検定

授業では発表と平行して、名刺交換の仕方やあいさつ、接客なども実技を通して指導している。学生の多くは接客の現場で働くことになるため、サービス接遇検定準1級から3級の内容にも触れ、知識の習得や問題演習なども授業に組み入れて指導している。全学科でサービス接遇検定の指導は行っているが、受験するかどうかは学生一人一人の自由である。しかし毎年多くの学生が自ら手を挙げ、挑戦するのだという。中には準1級を受験する者もおり、意欲は高い。

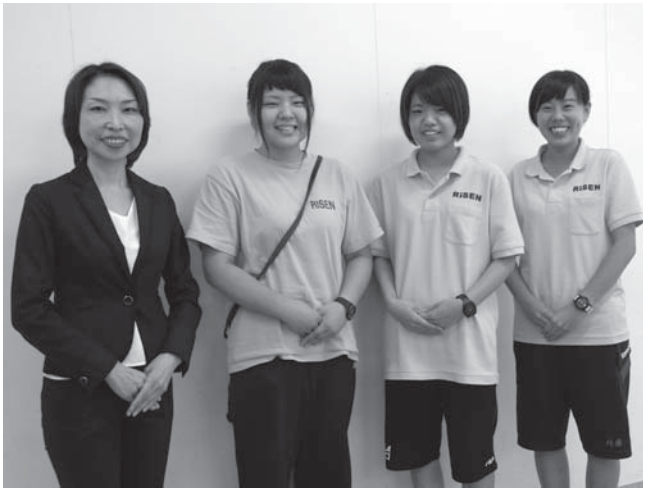


キャリアマナーの授業。発表者は聴衆を意識し，聴衆は発表者が発表しやすい雰囲気をつくる

ドッグトレーニング学科2年の岡林愛海（まなみ）さん、内藤有希さん、福武明日未さんは1年生のときに2級に挑戦した。皆、実技演習が印象に残っているといい、「言葉遣いや電話応対、あいさつや立ち姿などの学んだことは、社会で生かしたい」と意気込む。二重敬語についても苦労したと振り返り、「れる・られるの使い分けが難しかったです。『お取りになられますか』など、聞き慣れている言い方でも間違っているものがあるのだと知りました」（内藤さん）。「このような言葉遣いやあいさつの仕方は、インターンシップに参加した時に、改めてその大切さを実感しました」と岡林さんは振り返る。

それぞれ動物関係の職種を中心に就職活動を始めている。福武さんは動物病院の企業研究などを通して「動物病院は患者（飼い主）とのコミュニケーションはもちろん、動物看護師や獣医師との連携が大事にされています。採用時には人柄が重視されるので、あいさつや笑顔、コミュニケーションなどキャリアマナーで学んだことは、必ず役立つと思います」と話す。

はきはきと笑顔で語る3人だが、誰かが話しているときは必ず相手の方を向き、うなずく仕草も見せる。キャリアマナーの授業の成果は日常生活の至るところで発揮されているようだ。



（左から）楠本敦子先生，ドッグトレーニング学科2年の岡林愛海さん，福武明日未さん，内藤有希さん

楠本先生は最後に、キャリアマナーの授業に込めた願いをこう語ってくれた。

「心が伴った言葉や行動は、周囲や相手に居心地のよい雰囲気を与えてくれます。そのために、まずは自分自身を整え成長すること、そして一人一人の個性を認め、尊重し合うことが大切。この授業の根っこの部分を学び取ってもらいたいと思っています。自分の夢をかなえ、お客さまや周囲の願いもかなえられる、そんな社会人に成長することを願っています」。